



宮司プレス 第百六十四号

彦島八幡宮 宮司 ニーノス

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和三年 一月二十四日

◇新年のお慶びを申し上げます。 今年初めて

の宮司プレスの発行です。 昨年は、第百五十一号を皮切りに、発行の遅れを取り戻す軌道(きどう)の修正をはかりつつ、肅々と発行を重ね、通算十三号発行しました。 遅れの累積は、かろうじて、免れています。 十三ヶ月遅れの第百六十四号の発行です。

◇さて、一月七日の夕刻から降り続いた雪は、境内を、作家の立原正秋が、「紬(つむぎ)の里」に描いた情景のような、一面の銀世界にかえてしまいました。 昭和天皇様は、御製に、「ふりつもる み雪に耐えて いろかへぬ

松ぞををしき 人もかくあれ」

と詠(よ)まれています。 境内の松の木も、降り積もる雪に葉を落とすどころか、色もかえずに、どっしりと佇(たたず)んでいます。 ちなみに、私は、お気持ちをお包みする時に、封筒に、「松の葉」と認(したた)めます。 私が、神職としての初任(しよにん)神社である高橋稲荷神社に奉職し、アパートに引っ越しの際、ご近所の方に石鹼(せっけん)をお配りしました。 その時に、熨斗(のし)に「松の葉」と

認めるようにと、母より諭(さと)されたので

です。 御承知のとおり、「松の葉」は、細い一本です。「ほんのおしるし」という意味が込められています。 立原正秋著作の小説を勧奨(かんしょう)したのも、実は、母でありまして、あたり一面の雪景色を見ながら、そのようなことに、思いを巡らせました。 明治天皇様も御製に、

「あらし吹く 世にも動くな 人ごころ

いはほにねざす 松のごとくに」

と詠まれています。 歳末から、新型コロナウイルス感染症の拡大に歯止めがかからず、新年になり、緊急事態宣言も、再び出されてしまいました。 新型コロナウイルスは、

自分の命を守るためには、他者を避けるという、言葉は悪いですが、排他的(はいたてき)な意識と行動をかき立てています。 ソーシャルディスタンスであったり、移動や集会の自由を奪われてしまっていることなど、さらに、不安や恐怖、さらに不信が連鎖(れんさ)する日々です。 何か、ぎすぎすした空気におおわれて、運命共同体としての地域社会の暮らしの秩序

(ちつじよ)が乱れていくような気がしてなりません。 感染の拡大は、私たちの仕事や日常の暮らし方を見直す契機となつていてのではないのでしょうか。 私共も、当たり前前に祭典を執行することが、困難になりました。 昨年から、なぜ、このお祭りを厳修(げんしゅう)しなければならぬのかが、問われてまいりましたし、これからも、そこに向き合わなければなりません。 襟(えり)を正して、降り積もる雪にも耐えて、岩にも根ざす「松」の強さ、勇

気を忘れずに御奉仕申し上げたく存じます。 日本人の「強さ」「勇氣」は、いつも希望を見失うことのない、「神信心(かみしんじん)」だと思ひます。 その「神信心」とは、今、「ないもの」を嘆(なげ)くのではなく、「あるもの」に対して感謝を深めていく「心がけ」だと思ひます。「生かされている」「幸せはいつも自分の心が決める」、その感謝の思いこそが、希望を失わない、「神信心」にほかなりません。 前号にも記述(きじゆつ)しましたが、今年の干支(えと)は、「辛丑(しんちゆう)」であります。 新しいものをつかみ、つながるといふ意味です。「ないものねだり」でなく、「あるものさがし」という「神信心」で、新しく素晴らしいものをつかみ、つながり、その道のりが、「苦難(くなん)は幸福の門」、幸せへと続いていく日々でありますように、お祈り申し上げます。

◇一月の祭典行事予定（報告も含まれます）

▼歳旦祭 *一月一日

◆彦島八幡宮 ◆田の首八幡宮

◆福浦金刀比羅宮 ◆貴布禰神社

▼新年限定後朱印の頒布を始めました

▼書初め *一月二日

※干支にまつわる書初めをしました



▼元始祭 *一月三日



▼会社関係新年祭 *一月四日～五日

▼境内一面雪化粧 *一月八日～九日



▼田の首八幡宮どんど焼き

*一月十日

▼六連島八幡宮歳旦祭、戸別（こべつ）祓（はらい）

*一月十一日

▼月次祭 *一月十五日

▼どんど焼き

*一月十六日

▼朝粥会

*一月二十一日

※七草粥でした！



▼手水舎や蹲（つくばい）を花手水にしました



▼山口県神社庁、同下関支部関係

◇建国記の日下関奉祝会役員会

*一月十二日

◇山口県神社総代会役員会

*一月二十八日

▼教誨活動

◇集日教誨

*一月二十五日（男子・女子）